
星に願いを

ピノキオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星に願いを

【コード】

N0098Q

【作者名】

ピノキオ

【あらすじ】

もし、願いが叶うなら、絶対に叶うなら
君に会いたいと俺は願う。

もし、君に会えたなら、俺は君の笑顔を見たいと願う。
君は何を願うのかな……。

幼馴染に突然起きた、別れ。

そして、再会！！

一体この後の、2人はどうなっていくのか・・・。
そんな、切ない想いをえがいた恋物語です。

過去の想い

星に願いを・・・

「本当に、星に願いをとなえると、願いは叶うの？」

「うん。叶うよ。でも、人に優しくしていないと、叶わないよ。きつと。」

よく、小さい頃話した。

家をこっそり抜け出して、2人で歩いて近くの草原へ。

大きかったその草原も、今は小さくて、ただのくさっぱらにしか見えない。

俺には、幼馴染の女の子がいた。俺と、2歳違い。いつも、一緒だった。

名は、遠藤 奈菜花。すごく、泣き虫で俺なしでは外にも出たがらなかった。

母さん同士が、仲が良くて俺たちは出会った。

初めて会った時、俺の顔を見るなりすぐに泣き出す奈菜花。

俺は、何故か罪悪感を抱き、お気に入りだったオルゴールを見せた。

「そんなに、驚かせちゃったのかな・・・これ、見て良いよ。」
4歳と2歳の会話。きつと、ぎこちなかったんだろうな。

このオルゴールは父さんが海外に行く直前に、俺にくれたものだった。

綺麗な、丸い円状の台にタキシードを着た外人であろう男性と、白いウエディングドレスを着た

女性が手を取り合い、ダンスを踊っている。

ぜんまいを巻けば、台が回転し、2人が回るのだ。
楽しそうに踊っている風に、小さい頃の俺には見えた。

そんな、大切なオルゴールを見るなり奈菜花は、目を輝かせずつと眺めていた。

その日から、俺たちは毎日の様に遊んだり、笑ったり、喧嘩したりした。

相変わらず、弱虫のクセに俺にはくっつかかってくる。

ほっぺを必死に膨らませて、可愛い顔で怒った素振りを一生懸命に表現している。

でも、俺が笑ってごめんね。と言うと、笑い返しながらいいよ。と言う。

家も近くで、奈菜花は次第に俺の家に遊びに来るようになった。

「まなぶー、あそぼー!!」

このとき、小学生になっていた俺だが友達との約束をすっぱかしても、奈菜花と遊んでいた。

お互いに成長していても、奈菜花には、一つだけ変わらないことがあった。

俺の部屋に入っては、毎日オルゴールを鳴らした。

「そんなに、好きなのか?これ。」

「うん。なんか、まなぶって感じがするから。」

「ふん。」

でも、そんな当たり前の小さくて可愛い妹同然の姿は、いつしか俺の部屋から消えた。

あの、オルゴールと共に。

あの草原にも、俺の横からも。奈菜花の姿はない。

それは、突然のことだった。

奈菜花のお父さんが、フランスで仕事を始めると言い出したのだ。そして、奈菜花の姿はもうなくなった。あれは、最後の日だった。

「これ、やるよ。」
まだ、小学3年生の俺は、カッコつけながら奈菜花に手を差し出した。

その、おれの小さな手には 俺の大好きなあのオルゴール。

「え……。いない……。。」

オルゴールを見ながら、俺に言う。

欲しいの丸見えだよ。

「ちよつと、行こう!！」

「こら!！学つ!！」

母の声が、綺麗で静かな星空に響いた。

やばい……。帰ったら、完全に怒られる……。。

でも、俺は小さな奈菜花の手を握っている。

大丈夫。怒られても気にならないさ。

そして、着いたのはあの草原。星が何時になく、命を燃やして輝いていた。

そして、2人で寝転ぶと

「この、オルゴールには 星に願いをつていう曲が入ってるんだ。」

「うん。知ってる。いいよね。」

しばらくの沈黙のあと、いきなり鼻をすする音が聞こえた。

星空に照らされた、奈菜花の横顔には流れ星の様な、きれいな涙が流れていた。

泣きたかった。俺だって、泣きたかった。

でも、父さんに言われたんだ。

「まなぶ、女の子には優しくするんだよ。男なんだ。いつも強く、優しく、そうやって良い子にしていれば、父さんみたいに立派になれる。」

だから、泣かなかった。父さんとの約束だ。

「泣くな。泣いたら、強くなれないんだ。」

「でも、もう学と、会えなくなったら？遊べなくなったら？」

「寂しくなったら、このオルゴールを鳴らすんだ。泣きたくなったら、空を見るんだ。」

少し離れた所だから、いつかはまた会えるさ。」

そういうと、俺はオルゴールを奈菜花の手に置いた。

奈菜花は、こぼれた涙のあとをぬぐった。

よし、帰ろう。俺が立ち上がって、手を差し出すと、奈菜花は直ぐに手を取って俺の後をついてきた。

その日、帰ると母さんに怒られ怒られ……。酷い目にあった。でも、母さんは俺の話を知り優しく笑ってこつづばやいた。

「お父さんに、似てきたわね。」

この日から、早いもので10年の月日が流れた。

俺は、17歳。奈菜花は、今頃15歳。

どうしているのだろうか……。

俺は、あれから天文学部に入り、星のことについて日々、仲間と研究を重ねている。

将来は、何になりたいのかも、決まっているようで決まっていない。勉強は、コツコツとして公立の高校に入学したが、自分で満足できる事は、していない。

つくづく、冴えないぜ……。

俺という人間は……。

そして、今高校2年生になった今。

もしも、奈菜花が帰ってきたら、俺という人間を好んでくれるのだろうか。

そこまでの、強い男になれているのだろうか。

いつもは、真面目という言葉が似合わない俺も、青空を見ながら真面目に考える。

この草原も、いつしか大きく変わっていた。

走っても、走っても中々端までは遠い。

そう思っつて、走ったあの頃。

今では、少し歩けばたどり着く。

変わった。

俺は。

奈菜花は変わったのだろうか。

あの、オルゴールはどうなのか……。

過去の想い（後書き）

未熟なところが、たくさんありますが、

一生懸命書いていくので、最後まで読んでいただけたら嬉しいです。

過去の想いは、オルゴール中心で話が進みます。

良ければ、星に願いを を聴きながら読んでください！！

父さんも、もう帰ってきていて今では、6人家族。
しかも、俺は長男。
なんか少しだけ、重要な役・・・？

こうして、今日、俺の高校3年生の一日目が始まる。

いつもの通学路。そして、久しぶりに会う友達。
さあ！！始まる。

「おっはよーさん」

「おう、竹じゃん！元気か？」

「もちろんだぜ。お前は？」

「ああ、元気だぜ。」

話していると、桜が舞った。

その、花吹雪はこっちでは珍しい。

寒くて、開花は毎年5月なんだが、でもこの北風の中綺麗に優雅に舞っていた。

「それでさ・・・」

「ん・・・？」

「どうした？」

「いや、なんでもない。」

今一瞬、奈菜花がいたような、気がした。

まあ、ありえない。

すると、背中に大きな衝撃が襲った。

去年も、同じ事を言ったのに、また・・・。

「おい！亮！！やめる。痛いって。」

「なんだよー学う〜。」

こいつは、どこか変態だ。

授業中も、視線を送ってきやがる。

まあ、頭はクラス1！

結構、使えるやつだ。

歩いているうち、俺の横には7人が並んでいた。

いつもいつも、毎朝はこうなる。

これがまた、変なヤツばかりなんだがな。

久しぶりの学校は、皆の笑顔がまぶしくて何だか俺もハッピーになる。

ぴかぴかの廊下、そしてそれに負けないほどぴかぴかの、担任 松木の頭……。

新しいクラス。話した事もないやつ顔が目につく。

担任は、長い話を始めた。

よし！！今年もいっちょやりますか！

こっち向けよ〜。竹っ！！

ジッと見る……。

何やってんだよ。早くみれよ〜。

「おい。北山！何をそんなに、竹の顔を見てるんだ！」

「やっべー！」

「そんなに、竹が好きなのか……。」

「皆が俺をみてる。」

「恥ずかしいぞ。これは……。」

「あはははははー！！！」

「皆に笑われた。」

「自分でも顔が赤くなっていくのが分かる。」

「そして、北山がウインクしてきた。」

「今頃、おせーよ。」

「ん？」

「竹は、口を動かして何か伝えようとしている。」

「まあ、見てろ。」

「何かツコ良いこと、いっちゃってんの……」

「次の瞬間だった。」

「爆弾発言！！！」

「質問あるやついるか？」

「はい！！！！！」

「なんだ？竹。」

「先生の、頭ってなんでそんなに光ってますか？サラダ油塗って

るんですか??」

「ぎゃはははははー!」

「ばかもん!」

さすが、竹。俺のアイコンタクト分ってたんだ。

あいつ、先生にばれないタイミングを見計らってたのか・・・。

ふむふむ、勉強になつたぜ。

時間が過ぎると、体育館での始業式が始まった。

初めは、ふざけていたが睡魔に襲われたのか、いきなり俺は口をつぐんだ。

体育館に溢れる光に丁度あたる場所で、下を向きながら寝ようとしていた。

考えながら・・・。

奈菜花、元気か?

笑ってるのか??あの頃のようにさ。

彼氏は出来ちゃってるのか。

オルゴール聴いてくれてるのか?大切にしてくれてんのか?

その時だった。入学式の話が校長がし始めた。

俺は何も気にかけることもなく、また妄想していた。

元気な奈菜花を。

「・・・ということで、新1年生の中で受験トップだった奈菜花さんに代表して作文を
読んでいただくことになっています。また・・・」

ん？

今、何か言ったよな。

遠藤 奈菜花って言ったよな？

奈菜花が入学！？

まじかよ！！

あいつ、かえって来たのかよ。

俺は。心の自分に果して本当なのか！？と、思考回路をめぐらせた。
結果、言っていた。という、結果にたどり着いたのだ。

教室に戻ってくると、直ぐに松木の元へ行った。

「先生。先ほど、校長先生がおっしゃっていた、代表の作文を読む
受験でトップの新1年生とは
遠藤奈菜花 いいんですね？？間違っていないですね??」

「そつだ。あっている。」

お礼を言うのも忘れていた。

そして、ホームルームの時間が終わりあいさつが済むと全速力で走った。

桜の中を。

あいつに、会える望みを抱いて。

本当ですか！？（後書き）

さぞかし、変な物語ですが
お楽しみください。

月夜ざくら

「はぁ……。やっと着いた……。」

あの、全力疾走のうえにたどり着いた我が家。

走りながら期待したりもしてた。

家に帰ったら、奈菜花が居るかも知れない。

また昔みたいに

「まなぶー！！あそぼー！！」

そんな、威勢のいい声がこの家に響くのかもしれない。

でも、正直そんなことがありえるはずがなかった。

俺と、奈菜花を繋げるものなどない。

ケータイという電子機器も、文通という昔からの手段もない。

住所を知っているはずなのに……。

それでも、俺は信じたいんだ。

奈菜花の、ことを。

すると、インターホンが鳴った。

ピンポン……。

誰もいない家に音が鳴り響く。

もう、奈菜花への望みを捨てた。

あいつは、もう俺のことなど覚えていない。
そうだ。今まで、俺は何を必死に考え待っていたんだ……。

慌てて入ってきたせいか、スリッパを履き忘れていた。

ゆっくりと、玄関に向かいながら、重い足取りで歩く。

ついでに、スリッパを履きながら。

ガチャ……。

「はい。どなたですか？」

「宅急便です。印鑑を押してください。」

「あ、はい。ちょっと、待っていてください。」

印鑑を探しながら、クセなのかまた、奈菜花のことを考えていた。

なぜか、がっかりしていた。

もう、期待はしていないはずだったのに、俺はいつまでも昔を引き
ずっている。

ダサい。現代の言葉で率直に言えばこうなる。

印鑑発見。

「はい。コレでいいですか？」

「いえ、お名前を。」

「分りました。……よしと。」

「ありがとうございます。」「
ガチャン……。」

届いたのは、小さな袋。

相手の住所は、???

フランス？

ってことは、奈菜花か。

袋を綺麗に開ける。

中には、オルゴール。

俺があげたやつではない。

綺麗なドーム状の球の中に、小さな女の子と男の子が手をつないで
いる。

ぜんまいを巻くと流れた。

何の曲だろうか……？

………？

星にねがいを？

そして、1通の手紙が入っていた。

なんだ？

そこには、信じられない言葉が書かれていた。

学へ

お久しぶりです。
元気ですか？

突然ですが、もう少しで私は日本に帰国します。
ですが、私は昔とは違い、あなたと話す気はありません。

しかし、同じ高校に入ることになってしまったので……。
そして、小さい頃お世話になったので、そのお礼にこれを。

あの、オルゴールは捨てました。
気に入っていたわけでも、ありませんでしたので……。

それでは。

奈菜花

なんだ。この。荒々しい言葉の山は……。

俺は、信じられなさど、最低な言葉たちと、事実なのか分らない内
容に怒りがこみ上げた。

その夜は、怒りが俺を渦巻いていた。

「ただいまー。」

「お父さん！！学が、部屋から出てこないの。」
「そうか。わかった。なんとか、するよ。」

コンコン……。

誰なんだ。この怒りに足を踏み入れてくる奴は……。

「父さんだ。鍵を開ける。」

最悪だ。

母さん、言ったな。

父さんの場合、必ずと言って良いほど鍵を開けなければならない。

中学の時に、反抗期で鍵を開けなかったときがあったのだが……
なんと……ドアを壊して入ってきたんだ。

ドアの修理代は、俺のなけなしのお年玉から。

もう、あんな目に遭いたくはない。

いや、遭わせない。

「わかった。今、開けるよ。」

「ごめんな。むしゃくしゃ、している時に……。」

わかってるのかよ。

「ああ、いいよ。大丈夫。」

「母さんが心配してるから、俺はお前のところに来た。ついて来い。」

なんか、今の傷つくな……。

俺は、父さんの後ろを静についていく。

父さんも、老けたな。

俺が小さい頃は、もっと現役のサラリーマンって感じで格好よかったのに。

そんなことを、思っていた。

すると、父さんはいきなり玄関で靴を履き、俺を置き去りにして走り出した。

よくやるな。父さん。

中年太りのクセしてよ。

俺も後を追って走る。

直ぐに父さんに追いつき、並んで走っていく。

息を切らした父さんが言った。

「もう、お前に叶わんな。でも、まだまだ子供だ。」

父さんが、指を指したその先には
夜の桜が月明かりに照らされている、あの草原が春の風に揺られていた。

父さんは、スーツのまま草の上に座り俺に話し出した。

「いつかも、ここで話したな。」

「そうだね。父さん。」

「なんて言ったのか、覚えているか？」

思考回路が破裂寸前になっても、それだけは言える。

「女の子には、優しく。男なんだ。強く、優しく。良い子にしていれば、父さんみたいに立派になれる。」

「うーん。大事なこと、覚えてないのか？」

「ほか、あつたっけ??」

「ああ、一番大事なこと忘れてるよ。」

「何？」

少しの沈黙の後父さんは言った。

「人間らしさを忘れるな。きつと、小さなお前には難しかったんだろ。でも、今なら分かる。」

桜吹雪が舞った。

「つまり、人間は動物だ。本能的なものがある。

人間には、感情がある。

人を愛しいと想う心。

悲しいと思う心。

楽しいと、思える心。

寂しいとも、腹が立つとも思える心を持つ。

様々な心だ。

ただ、その心に嘘をつかないことだ。

愛しいと思えば、誰に何と言われても愛し、守り通せば良い。

悲しくてたまらなくなったら、たまには母の胸に父の胸に、飛び込んで泣くのも良い。

そうしなければ、いつか人間は壊れるぞ。

何で、悩んで今のお前があるのか分からないが、このことは憶えておきなさい。

きつと、役に立つ。」

「分かったよ。」

そうだった俺の頬には、何故か純粹な涙が流れていた。

そして、男2人が見上げた星空には、刹那に流れゆく、星の姿が光っていた。

月夜ざくら（後書き）

短くて、申しわけありません。

家族って良いですね。

書いていて、シミシミ感じました・・・。

はあ、早くに目が覚めすぎました。

またまた、変なストーリーですが、お楽しみください。

ゴジラのような声・・・

あの日、なぜ俺は泣いたのだろうか。

今でも、はっきりした事は分からないでいる。

だが、父さんが言った本能的なもの。
これが、一番大きなものだと思った。

不思議と、父さんの言っていたことは間違いが一つもない。

小さい頃から、カツコイイのは仮面ライダーだとも、ウルトラマン
だとも思わなかった。

見知らぬ外国で一人、働いて頑張っている父さんが一番の俺のヒー
ローだった。

父さんからの月に一度の手紙は、何よりも嬉しかったんだよな。

でも、今ではもう中年で身体も弱くなってしまった。

今度は、俺が父さんのように家族を守っていかなければならない。

そんなことを考えながら、通学路を歩く。

今日は入学式だ。

でも、もう俺には奈菜花への想いはない。

あいつが、ああ言った以上もう、俺があいつを思うこともない。
逆に言えば、あいつが俺を思い出すこともないんだ。

「おはよー!」

「おはよ。」

「何、学? 元気ないな……。」

「いや、そんなことないよ。」

「新1年生で可愛い子いるかなー!」

「お前はそれしか頭にないのか、竹。」

「まあね!」

「おはよー。」

「おつ。夏実じゃん。おはよー。」

「天文学部、人数集まるかな……。」

「まあ、少し心配だな。」

「部長なんだから、しっかり募集してよね!」

「はいはい……。」

いつになく、俺の周りには色んなやつがいた。
女子も、男子も。

なんだか、頭がすごく、すっきりした。

今までの自分がバカらしくて。

笑えてくる自分の姿がそこにはあった。

学校へ着いても、俺はいつもとは違っていた。
皆の所へ自分から行き、話す。

考える事も、ぼーっとする事もない。

純粹に、楽しめる自分がいた。

これで、良かったんだ。

さて、地獄の時間だ。
入学式。

そして、地獄は一番に始まった。

「では、初めに受験生の成績トップの 遠藤奈菜花さんに代表して、
これからの学校生活での
抱負を話してもらいます。」

壇上を、ゆっくりと上がるショートカットの女の子。
メガネをかけて、読み始める。

そして、顔を上げた。

奈菜花か・・・？

俺の中でのイメージとは全く違っていた。

顔は、優しく、メガネがよく似合う。
堂々と、読み続けている。

綺麗な制服に身を包み、初々しい姿が輝いて見える。

その時、思った。
父さん……。やっぱり、そうだ。

人間は、愛しいという想い、可愛いと感じてしまつ心に嘘はつけない。
い。

今の俺は、あいつとつりあってないかも知れないが、いつかはつりあう男になるよ。

奈菜花。

響きが、優しい名前。

あいつの、笑顔が俺には誰よりも、一番輝いて見える。

やっぱり、好きなんだ。俺は。

あいつの、笑顔が。

そう感じた。

この日は忙しくてもうクタクタだった。

「天文学部どうですか？」

「夏実、無駄だって……。いまどき、星なんかに興味あるやつなんて、少ないんだから。」

「そうだよ。この。竹様も、言ってるんだから、間違いなし！」

夏実は、俺たちを無視して続けた。

「星について、学びたい人！！天文学部は、その夢叶えるよー！」

必死に、呼びかける夏実の姿は間違っていないよな。

俺も、言うか。

「星に願いをかけると、願いは叶う！！どこから、きた説なのか調べてみたい人！！」

「ねえ……。呼びかけるの下手すぎだから。」
「いや、まあ見てるよ。」

「よっ!!学ちやぁーん!!」
「竹、黙ってる。」
「うつす……。。」

新1年生の女の子が来た。
よし!!いくぞ!

「あの……。君たち、綺麗な星に興味ない?この学校の近くに良い観察場所もあるんだ。
入らない?」

俺が言うと、3名の女の子たちは、こそこそと話し始めた。
「星って良いよね!!」
「でも、私は茶道部に入りたいしなあ。」
「それにしても、あの女の先輩可愛いね!!しかも、あの話しかけてきた男の人もカッコイイ!!はいるうかな。」

俺には、何をこそこそやっているのか分からない。
でも、星について学んで欲しいという思いは強い。

「考えておきます!多分、入ります!」
1人が言った。

自分が呼びかけたことに対して、嬉しい返事だ。

「そっか。じゃあ、待ってます。ありがとう。」
「はいっ!!」

この調子で呼びかけていき、部活入部呼びかけは終了した。家に帰ると、制服も脱がないまま、ベッドに倒れこんだ。

そして、次の日、事件は発生した。

「おはよー。夏実。」

教室で隣の席の夏実に呼びかける。

「おはよー。じゃないわよ!！」

なんで、そんな険しい目で俺を見るんだ……。

何か、俺に恨みでもあるのか!?

「どうしたんだよ。朝っぱらから、声でかいな。」

「声がでかいのは、生まれつきなの!！」

「分かったって。」

「天文学部、人気急上昇よ!!!しかも、その理由何か知ってる?あんたが、カッコイイから。」

さらには、私が可愛いから、よ!?!おかしいでしょー?」

お前、何となく言ってる事は分かるけど……。

自分で自分のこと可愛いって……。

なんか、聞いてて不愉快だぞ。

「ふーん。」

「何よ!ふーん、って!!!」

「別に、良いんじゃないの？最終的には、本当に星が好きなやつしか残らない。」

「なんで、わかるのよ！！」

「お前、声でかいて……。」

つくづく、うるさい。

女子という生き物は……。

奈菜花にせよ、夏実にせよ。

なぜか、この日を機会に一年生が俺たちの教室に来るようになった。

夏実は、怒っていたが、あいつも気が弱い。

1年生の男子に話かけられると、デレデレ……。

そして、それが終わると毎回、俺に

「どうにかしてよ！！私、女子なんだから！！！」

一体、そこに何故女子が関係するんだよ……。

俺は、最初は話を聞いていたが、今では面倒なので無視しています。

これが、残された俺の道だ。

その代わりに、竹が相手をしていますが……

竹の、言葉に夏実、ゴジラは

「あんたはいいから！！！」

と、大声を出して拒否しています。

そうして、ついに新部員を含めた新天文学部が幕を開けた。

しかし、そこには信じられない光景が、広がっていた。

部員が多すぎて、部室に入りきらないのだ。

もともと、狭い部室だったが予想以上に多い。

なんとか、全員が入りきった。

よし、始めよう。

「新部員の皆さん、私が天文学部、部長の 藤崎 学だ。よろしく。」

「私は、副部長の 山本 夏実です。よろしく。」

「ところで、皆さんは星について学びたい人ですよ？まず、最初に宿題を出します。

家で、1週間星の観察を行い、紙に記録してきて下さい。」

ざわざわ……。

「星について、学びたいあなたたちなら出来ます。では、今日は自己紹介をしたら解散！」

しかし、俺が目を見たのは、新入部員の中に 奈菜花がいたことだ。

友達に、誘われたのか、不満げな顔をしながら話を聞いている。

きつと、奈葉花は調べてこない。

それでいい。

今のあいつには、星など頭はない。

今、頭にあるのは過去の思い出と、向こうで過ごした思い出だろう。

自己紹介も終わり数々の1年が不満を言いながら帰っていった。

やれやれ、生きるのは大変だ。

でも、これも俺が強くなる為の課題だと思えば大丈夫。

あの、オルゴールを聴きながら頑張ろう。

ゴジラのような声・・・（後書き）

なんだか、変なストーリーが益々、変になってきています。

本当に申し訳ありません・・・。

読んでくれる人の事を思いながら頑張ります！

また、次も読んでほしいので・・・。

私の想い

「まなぶ……」

「起きなさいよー奈菜花!!」

「はい!!」

お母さんの声は、甲高くていつも朝びつくりする。
そして、私はカーテンを開けた。

そこには、何一つ変わらない朝が待っていた。
小鳥が鳴き、風が吹く。

あれから、フランスに私は住んでいる。

とても良い土地だ。

でも、あの頃のような草原も、星空もない。

思い出……何より大切なかけがえないもの。

あれから、何年の月日が私の心を閉ざそうとしたのか……。

数えれば、きりがない。

今では、この土地にも慣れたが、来た時は簡単に慣れるなんてめっ
そもなかった。

幼いながらに何度も、私は日本人だと、死ぬほど思った。

毎日、いつになればこの長い年月から逃れられるのかと疑問に思った。

たくさんのお思いが、そして私の小さな心がきゅーうとなり、苦しかった。

日本で学と遊んだ時のあの日、あの時を考えれば考えるほど。

私は、日本でいえば中学生の時、初めて告白された。相手は、フランス人の同級生だった。

彼は、同級生皆から愛されていたし、私自身も友達として大好きだった。

私は、迷った。

ここで、okを出せば私は幸せになれるかもしれない。

毎日、昔の思い出に胸を締め付けられないで済むんだ。

その考えが私の心に浮かび上がった瞬間だった……。

ヤッパリだめだ。だめなんだよ……。

学のお顔を考えれば考えるほど、心が締め付けられ、心臓の鼓動がおさまらない。

どんなにカッコイイ男の子を見ても、告白されても、ここでの生活に慣れても、

私の心には必ず学の笑顔がでてくるんだもん。

あの、優しく包む大きな手が、あの優しくそして強く大きな背中が私の心を包んで離さない。

そして、私はその場で答えを出した。

・・・NO・・・と。

そして、相手のフランス人は何事もなかったかのように言った。

「うん。分つてたよ。日本にいる幼馴染が好きなんでしょう？」

それでも、この思いが押さえられなかった。でも、僕は君のそういうところに愛しさを

感じたんだ。」

彼は、置いてあったリュックを背負うと、後を向かないまま手だけをまるで微笑ませるかのように誰もいない学校の廊下を歩いていった。

それから、何度も考えた。

日本で過ごした幼少期を忘れずに生きていくべきなのか・・・
それとも、フランスでの新しい日々を優先するべきなのか・・・

自分で考えても答えは出せなかった。

私の机の引き出しの中には、学の住所と生年月日を書いてあるメモが入っていたが、自分の中に手紙を送る自身などこれっぽっちもなかった。

そして、ある日ふと考えた。

私のこの高鳴る鼓動って、
一体何ものなんだろう・・・？

昔の友達に会いたくてむずむずしてるの？
そんな、友達に高鳴る鼓動などあるの？

私、恋してるんだ。

あの、大きな背中と優しい笑顔に恋してるんだ・・・。

それから、毎日私は考えた。
いつ、会えるのかな・・・。

元気にしてるのかな・・・。
まだ憶えてくれてるのかな？

最近は鳴らしていなかったオルゴールに語りかけながら
私は、学に会えるその希望を胸に抱いて毎日を過ごしていった。

しかし、それから間もなく私は現実を突きつけられた。

「ばかもん！！！！」

「お父さん！！！！大丈夫！？奈菜花！？」

「大丈夫だよ。お母さん。」

私は、日本に行きたいと打ち明けた。
理由は、学が好きだということ。

こうなるのは、分りきったことだった。

私には、もう一つだけ命に代えても守りたいものがあるから・・・。

妹に負けました……。

日曜日……。

たまたま、俺の家の電話が鳴った。
母が寝ぼけ気味のまま電話に出た。

「はい……あつ！はい！ええ。分りました。伝えておきます！」

何故か、母は妙に目をぱちつちつと開き笑顔になった。

おいおい……怖いぞ。その、ビフォーアフター……。

その、余りの変貌ぶりに父さんも心配する。
そして、そのパチクリした目が向けられた。

俺に。

「とうとう、あなたにも彼女が出来たのね！！！」

は……？

「お母さん安心したわよ！」

え……？

なんのことだ？

俺は根拠のないその話に、驚きつつ

「俺、誰とも付き合っていないけど?」と前面否定。

「恥ずかしくないで!夏実ちゃんって子から電話でお誘いがあったわよ!」

「夏実?あいつとは、部活で部長と副部長の仲だから。」

「あら・・・そんな子と普通ショッピングに行くの?」

「それは、今日夏実と竹と部活の買出しに行くだけだよ。」

そう、言った瞬間、母の顔は何と元通りのタダの寝ぼけたオバサンへと姿を変えていた。

そして、またもや驚きを隠せない父親の顔。

そして、いきなり事件は起きた。

「お兄ちゃん!!私も行きたい!!」

そう言い出したのは、我妹の優歌だ。

俺は一瞬顔を引きつらせた。

コイツと、ショッピングに行って良かったことはない・・・。

「お兄ちゃん!これほしい!!」

「いや・・・。それ高すぎだぞ。」

ピンクのクマのぬいぐるみ。

なんと、お値段 一万円……。

さすがに、あのジャワネット ハカタ でも安くする事は出来ないだろう。

そして、その日家に着いた時、俺の財布からは丁度一万円がぽっかりなくなっていた。

なんやかんだで、コイツを連れてはいけない。
絶対に……。

しかし、思わぬ敵が潜んでいた。

「おお、いいじゃないか。たまには、お出かけしたいもんな？優歌。」

「うん！ー！」

そう、あの何よりの味方であるはずの俺の幼少期のヒーロー。

父さん……。

このタイミングで何を言い出すのだ！ー！父さん！ー！

俺は一瞬の隙に思考回路を張り巡らせある賭けに出た。

「今日は、ゴメン。部活の買出しだからちょっと無理だよ。」

「え〜！ー！？？」

よし決まった！！ナイス！！
しかし、戦いは始まったばかりだった。

「なんで、買出しだったら行っちゃだめなの？」

泣きそうな目が俺に訴える。

ヤバイ……。

そして、家族団らんの朝ごはんの席が一度沈黙に包まれた。

俺はトーストの食パンを手に持ったまま停止。

そうして、恐れていた事が起きた。

「うえくん！！！！！！！！！！」

沈黙は終わった……。

「ほら！！泣いちゃったじゃないの！！お兄ちゃんしっかりしてよ！！」

海歌が怒りながら話し出した。

「お兄ちゃんが連れていけないのは、自分が妹なんか連れて行きたくないからでしょっ！！」

高校生にもなつて妹なんか！って思ってるんでしょっ！！」

なんだこの展開は……。

別に俺はそんなこと思ってなんかいない。

奈葉花が居なくなっただけから、俺はこいつたちを妹としてやっと見れるようになった。

だから、こいつらに未だに罪悪感があった。

よし、決めた。

「別にそんなこと思ってないよ。俺の大事な大事な妹だよ。高校生になったからって恥ずかしいなんて思ってない。ただ、今日のことに関しては学校のことについてだからさ……。」

優歌が笑顔になる。

「わかった！じゃあ、待ってる！！」

「いや、いい。ついて来い。2人ともな。」

予想外の展開に母さんと、父さんが微笑む。

そして、ヤッパリヒーローは俺の父さんだった。

「じゅあ、お前たちにはおこずかいをあげるから好きなもの買っておいで！」

お父さんは自分のおこずかいの中から
3000円ずつ、2人にあげた。

さすが！とじちゃん。

しかし、問題は夏実をどう説得するかということだ。

ゴジラになり続けているあいつ……。

あんな、やつにどう言おうか。

悩んでいると、2人は幼いながらに

とびっきりのおしゃれをして俺の目の前に現れた。

「どう？お兄ちゃん？」

優歌が俺にきいた。

俺は、2人に向かって答えた。

「とつても……」

「とつても?????」

「可愛いよ。」

2人は笑っていたが、俺は夏実になんと言おうかということしか頭になかった。

そうして、俺が始めて1人でこのチビたちをショッピングに連れて行くことになった。

とびっきりの笑顔の2人を連れて。

妹に負けました……。(後書き)

私には、従兄弟と同じような思い出があります。

つい、お正月も下の2人を連れて買い物へ。

自由が奪われ楽しいんだか、楽しくないんだか……。

といった気分でした。

そんな、思い出を書きました。

今回は、シヨッピングモール本編です！

家族（妹たちのストーリー）

「夏実……。悪いが、コイツラも連れてっていいか……。？」

「誰？……！？」

「俺の、妹たちだ……。？」

「なんで、こんな大事な日に！！駄目よ！！！」

こんな、ことになっちまったら俺自身妹に悪くて泣いちゃいそうだぜ。

おっと……。時間だ。

「いくぞー。ほら、おいで。」

「うんー！！」

優歌が、笑いながら俺の手を握る。小さな手が、俺の大きな手に包まれている。

昔、奈菜花と手をつないだ時俺の手はもっと小さかった。

その、俺が今となってはこの大きな手で妹の手を握ってる……。。

なんだか、不思議な感覚がするんだ。

よく、自分でも分からない。

でも、今初めてこんなにも妹の存在を可愛く感じた。

生まれた時は、サルみたいな顔してワンワン泣いて。

ハイハイ、して歩き回ってたのに。

今では歩幅は小さいものの俺と同じ道を同じ速さで歩いている。

成長したんだな。

そう、思った時だ。

この、温かい気持ちを怒りに変えるお得意さんが背後からやってきた……。

おい………

「まなぶウゥ!!」

俺は、妹を俺の前に押しして避難させた。

海歌は、ツンとした顔を後に向けるなり、急いで避難したようだ。

ごっつん!!!!!!!!

鋭い衝撃が背中を行ったりきたりした。

「たけ……。お前なあ……。人の背中に乗るなっていったんだろ!!!!!!」

「ごっつめーん!!!学ゥ!!!」

俺は、こんな何回言っても聞かないこいつを正直、嫌ってるんだ。でも、それ以上に親友としてそーいうバカな所を気に入ってる。

「もうやめろよ!! あはは。」
怒りを抑えながら、どうにか渾身の笑顔をつくった。

妹たちは、びっくりしている。

いつも、家にこの変態が来ているのは知っていたがこんな近くでこいつの危険さと、
変態さに驚かされるとは、こいつらも予想してなかったみたいだ。。。

優歌は、俺の服の袖を引っ張るぐらいだ。
よっぽど、びっくりしたんだろう。

それから、なんとかお互い打ち解け、事情の説明も終わった。

後は、あのゴジラをどう説得させるかだ。

あいつとは、ショッピングモールで直接待ち合わせた。
案外、20分あたりで着くので、歩いて行く事にした。

手を握る役は、海歌に交代。

買出しの話に。。。。

今日の買出しは、まず新入生歓迎レクで使うであろうパーティー道具。

そして、うちの部活では1人に1冊ノートが配られる。

それに、宿題としてまたは、部内の発表内容のまとめ、観察結果を記録する。

その、必要最低限の必須道具の買出しなのだ。

そうこう、竹と話しているうちにショッピングモールについた。

ジュスコ。ヘオン系列の店だ。

そして、入り口には真っ白なワンピースに、ピンクのパステル色の可愛いリボンをした女の子が立っている。

まさか……。

「うるさいわね〜!!!」

「生まれつきなのっ!!!」

目を疑った。

あれは……。ゴジラ、夏実……?

「お兄ちゃん!!!あの人、夏実さん?」

海歌が、輝いた目で聞いてくる。
きつと、あまりのおしゃれさに目を奪われたのだろう。

「たぶん……。そうだと……。思う……。」

全面的に合っているのか分らないので、とりあえず認めておいた。

「なっつみ〜!!」

竹が、言つと夏実知らないふりをして、腕時計を気にしている可愛い女の子を演じている。

どうやら、見た目は変わっても性格は変わらないらしい。

「夏実。ごめん。今日、妹も連れてきたんだ。だから、ちょっと迷惑かかるかも……。」

「おつす!!学。いいんじゃない?可愛いね!2人とも。山本 夏実です。よろしくね!」

「あつ!よろしくお願いします!私は、学の妹の藤崎 海歌です。こっちは……。」

なんといいのか、女子の会話で盛り上がったらしい。

だから、俺は意外な返事をした夏実の背中をおいながら、ついていった。

しかし、何度もいうとおり夏実はゴジラです。

この後、衝撃的な事件が待ち受けているとは俺も予想しなかった。

買出しが、始まり最初はふざけていた俺らも真面目に買出し。

特に、ノートは毎年わかりやすいように、1人1人違う色のノートを買っている。

それには、何時間もかかった。そして、お昼を迎える頃……。

あの、ハンバーガーの美味しい ハクドナルドで、昼食を食べようとしていた俺たちの背後に、
只者ならぬ気配を感じた。

感じたことのない、オーラ……。

いきなり、夏実が手をふる。

後を、向くと少し顔立ちが誰かに似てるような？
中学1年生ぐらいの男の子が現れた。

「おい。夏実。あれ、だれなんだよ。」

竹が、何故か腹立たしそうな顔で言う。

「もしかして、夏実しゃんのボーイフレンド君ですか？」
ぎこちなく、優歌が聞いている。

うん、うん……。

出来てる……。出来すぎている!!!

よし。うちの。妹よ!!あいさつせいっ!

「どうも。竹 正志です。」

おいおい!!!そこは、普通妹優先だろうが!!!

「どうも。俺は、藤崎 学です。よろしく。お前らも。」

いけっ!妹よ!!!

「あ、あの……学の妹の 藤崎 海歌です。こ、こっちは 私の妹の 藤崎 優歌です。」

まあ、まあ、良いセンいっただろう……。

「ごめん。突然。実は、今日家に誰もいなくてさあ。ずっと、1人にさせるわけにいかないから!」

「ああ、分ってるよ。いいんじゃない、ねえーか?もう、あいつら上手くいってるし。」

「だね!!!」

すると、下から感じる視線の先に優歌がいた。

そっかあ・・・こいつは、遊び相手いないのか・・・

俺の出番だな。

「よーし。おんぶしてやるよ。」

「私、もう3年生だから!!」
言われちゃった。

「あははー！ー！ー！」

「そこ！笑うな!!」

しばらくたって、もうそろそろ帰る手前だ。

優歌が、突っ立っているのが見えた。

その、視線の先には CD売り場がある。

ガラスの小ケースの中には、クラシックのディズニーメドレーのCD
Dがおいてある。

買いたいようだ。

そして、それをレジにもっていった。

あいつ、そんな趣味あったっけ・・・？

でも、俺は何もわからず走ってきたあいつと手を握ってそれを最後に店をでた。

あの、先ほどの2人は煮えきったのか顔が真っ赤だ。

こうして、全てが幕をとじた。

なんだか、家族のぬくもりって、こんななんだな……。

布団にもぐりながら、思っているとそのうち、瞼が重くなって……

何かに、吸い込まれたかのように眠りについていた。

ピチュ、チュイ……

小鳥のさえずりが聞こえる。

「……ん？」

なんだ……？なんか、固いものに、頭ぶつけたような……？

「やべっ！！寝坊した！！！！ん？」

お兄ちゃんへ

おたんじょうび おめでとう！

これからも やさしい お兄ちゃんできてね！！

優歌

こんな、置き手紙の横には

きれいにラッピングされたCDがあった。

デイズニード クラシックス 星に願いを

星に願いを唱えたら、本当に願いはかなうの？

きつと、叶うよ。人に、優しくしてればね。

家族く妹たちのストーリーく（後書き）

なんというか・・・

短くも長いような話でした。

どうでしょうか？

家族の温かさから、学ぶものって多いですよね！

そんな、優しい思い出をコレを読んで思い出して頂ければと思います。

今回は、日常編にもどります！

また、読んでくださいっ！

時を越えた想い / happy day

4月22日。

俺が生まれた日。

そして、俺の未来が出来た日。

そして、数々の人と出会った日。

赤ん坊の時は、そうだった。

でも、今は違う。

可愛い妹たちに囲まれて、そして幼少期時代のヒーロー父さんと、顔のしわが増えながらも、どんどん心が美しくなっている母さんと、

俺が生まれた日を祝う幸せな日。

ろうそくが多くなると、年をとり天国への道のりは短くなる。

しかし、人は皆、何故かそれを喜びとして心待ちにする。

俺が思うにその理由は、1年1年の中で出会った数々の幸せたちに、ありがとうと

心から示すことだと思つ。

こうして、暗闇に小さくポワンと灯った火を見てると、幸せな1年

だった、と感じる。

そして、目の前に浮かんだ可愛い小さな顔と少し大人になってきた中くらいの顔と、

中年でゴツゴツな大きな顔、そして俺の心の支えになってくれる優しい中くらいの顔に、ありがとう！と心から言いたい。

「……ハッピーバースデー トゥーユー！」

子供らしい歌声が耳に響く。

嬉しい。

朝、俺の頭の近くにあったのはCDだった。

それも、教えてもないのに何故か俺の好きな歌の。

優歌とは、たいした話もしない。

しかし、優歌は知っていた。

何でかは全く想像がつかないが、少しきにかかったのはあいつが俺の部屋によく入ってくる事。

最初はいちいち怒っていたが。今はもう気にしていない。

まさか……

いや、ないない。

でも、まさか……

いや、ないない!!そんなこと。

でも……

「ねえ!!!!お兄ちゃんってば!!!!」

え?なんだ?

「学!!!!聞ってるの??」

「あっ……ごめん。考え事してた。」

「早く、消してよ!!」

何を?

「ろ・う・そ・く けしてっ!!」

「あ、わかった。ごめん。」

……フ~~~~!!……

「おめでとーう!!!!」

この日は記念すべき俺の17歳の誕生日。

家族との、誕生日の祝いは終了!!

やっときたぜ!!

そう言いたかった。普通、この後は友達に祝ってもらって……

はあ、はあ、はあ。

少しだけ寒い外は何故だかやけに静かだった。

誰も、いない。いつもなら、高校生がチヨコチヨコつろつろしてんのに……

しらねー奴まで、俺のこの記念すべき日には外には出ないのか!!!

悲しい。その、一言だった。

すると、学校の門が見えてきた。

薄暗くて、気味が悪いがこんなかげのある学校も好きなんだよな。

そうやって、なんだか自然にかんがえていたら、夏実が息を切らして俺の方にやってきた。

そして、あいさつする前にいきなり手首をぐいっ!!!とつかまれた。

「ちよつと!!!来て!!!」

なんだよ。

悲しい心が益々身体のおちこちに広がっていく。

そして、身体をふらふらとして適当に走ってきた道の先には夏実の家があった。

「大変なの!!!」

夏実が俺に言ってきた。

一体何があったんだろつか……

すると、目の前を黒の布で隠された。

「何すんだよ！！てか、お前誰だよ！夏実！！大丈夫か？？」

「・・・」

声がしない。まさか！！！！

「コツチへ歩け。」

何処かで聞いたような、声の高い男の声だった。

言われるがままに俺はそいつに従う。

そして、しばらく進むと・・・

優しく目隠しがはずされた。

そして、俺は目を疑った。

なんと、目の前には竹が立って笑っていたからだ。

起きた事の整理がつかず、驚いている俺に竹は手招きをする。

何処かの家だろうか？

きれいな、ドアを開けると・・・

ぱんっ！！！！

ぱんぱん！！ぱん！！

「学！！！！誕生日おめでとーーーー！！！！」

うわあ・・・すげえ・・・

おれの、視界いっぱい飾りつけとそして、皆の顔。

嬉しくて、たまらなかった。

「ごめんね。びっくりした？」

「おいおい、夏実・・・聞いてないぜ。」

「こんなの。」

「おかげで、スウェットで来ちまったじゃねーかよ。」

でも、そんなサプライズが嬉しくて、俺の心は早速幸せでいっぱいになっていた。

でも、俺がもつとビックリしたのはその大勢の人の中に奈菜花がいたことだった。

他にも、天文部の新入生が数々来ていたから、きっと奈菜花も誘われてきたのだろう。

「みんな、学のことお祝いしたかったの！で、今日はこの中で音楽が出来ます！って人たちが

いたから、今から演奏会ね！！」

何を言われたのか、嬉しさの余り理解できなかった。

しかし、驚いたのはピアノにゆっくりと腰を下ろす奈菜花の姿があったこと。

きれいな、細い指が真っ白なピアノの鍵盤に下ろされる。

そして、その横には亮。そう、皆さんもよくご存知。変態だがやけに、使える奴、亮。

彼は、なんやらバイオリンが弾けたらしい。

「ん？なんか、今ウインクされた気が・・・。気のせいだな！」

その他、天文学部の後輩が俺の前にたつた。

すると、いきなり始まったのはあの曲だった。

「星にねがいを」

隣で夏実が俺にいった。

そうだ。これは、確かにそうだ。

なんだか、ありえない錯覚にとらわれているような、そんな不思議な感じがした。

美しい旋律が俺の耳を通っていく。

そして、それを奏でている張本人たちがいる。

そして、あの奈菜花が何故か俺の目の前にいる。

意味が、理解出来なくなった。

時は切なく儂いもので、その時は感じられてもいずれば感じれなくなったり、

楽しくて、止まれば良いのと思った時間はすぐに通り過ぎてしまふ。

そして、何より悲しくてつらくって、そんな思いは永遠に続いてしまふ。

この音楽を聴いていた。ピアノを演奏しているあいつを見ていた。

そんな、小さなちっぽけな夢さえも残酷なことに、時という名の風にさらわれていってしまうんだ。

「すごかったねー!!」

そんな、声が聞こえた。

その、夢のように輝いた時間も終わりみんな自由に話して笑った。

でも、儂いだからこそ、その一瞬に全てをかけられるような気がします。

そして、楽しかった時間も終るが定めだ。

帰りは1人で、あの草原へ。

この日は、いつになく綺麗に星空が見えた。

大分前に、言ってた良い観察場所はここ。

心が、落ち着く唯一の場所。

すると、この夜空を見つめる人の影があった。

奈菜花だった。

なんか、前の面影もない奈菜花を見て、改めて変わったことに気が付く。

俺の足は勝手に、奈菜花のもとに向かっていた。

心は行くな!!と必死で止めるが、身体が言うことをきかない。

これが、人間の本能ってやつかな。父さん。

そして、俺はついに来たんだ。

長い年月を得て、いや違う。

時を越えて、会いたかったあいつの横に。

この、広い広い夜空の下に。

時を越えた想い / happy day (後書き)

なんか、かなり真面目な感じでした。

ちよつと、たまには少し真面目でいかないとなあ・・・と。

それにしても、この後の2人がどうなるのか、

面白く、そして胸が温まる文で未熟な私ですが書いていきます!!

応援よろしく、お願いします!!

皆さんが読んでいてくれることを想像しながら頑張ります!!

mine 私のもの

4月22日。

私の好きな人が生まれた日。

私にとって大きな1日。

フランスにいたころは、この日が憂鬱だった。

住所も電話番号も知っているのに、机の引き出しを開けられない。

プレゼントも送れない自分の心の弱さに罪悪感を感じて、私はその償いにオルゴールを

聴いて、日本へつながつているはずの夜空を見ながら想いよ、届け！！と願いを唱えた。

でも、わかっているのです。

願いは願うだけではどうにもならないことを。

自分で伝えないと、伝わらないことも。

でも、日本に行くことが出来ないせいにして手紙も送れなかった。だから、今日は嬉しい。

心から、嬉しい。でも、その反面悲しい。

母が許してくれたから、ここに来ることが出来た。

ならもう、2度とここに来ることが出来ないのかもしれない。

本当は、日本にいて想いを伝えて、手もつないでみたい、同じクラスで隣にもなってみたかった。

本当は、本当は・・・

学の笑顔を隣にいて見たい。

本当は捨ててなんかいない、あのオルゴールと一緒に聴きたい。

笑ったり、泣いたりしてみたい。

でも、出来ない!!

離れなければならないって、わかりきっているのに、一緒にいたら辛い。

また、日本が恋しくなっただけで泣くのなんか嫌だ。

だから、せめて同じ学校に入学して同じ部活にいて、学の手紙を見たい……。

そんなちっぽけな想いだけど、私は今日夏実さんをお願いして演奏会を開かせてもらった。

言葉でだめなら、音楽で……。

私が守りたかった大切なもの。

それは、この学への想いと……
音楽。

フランスに行ってから、私の心の支えは音楽、ただそれだけだった。言葉も文化も違う人たちと、私をつなぐもの。それは、ただ一つ。

音楽。

フランスは、世界でも有名な音楽が発達した国。

クラシックは、数々の人たちの心を魅了し今でも多くのオーケストラが活動を行っている。私は、そんな人たちが今も多くいることに感動し、

ぐにピアノを

始めた。

だから、父は日本で暮らすことに反対したのだ。

私には、わかっていた。

日本に行けば、どうしても切なくなる。

すぐ近くにあって、手でふれられるのに、ふれようとしても自分の心がそれを止めてしまうことも。

なぜなら、私にはフランスで学んだピアノというものがあるから。

だけど、気持ちに整理がつかない。だから、日本にきた。

もう、これが最後。

この思いを感じるのも最後にするんだ。

だけど、あのパーティーの後悲しくて。

もうあんな、顔も見れなくなるんだ。そう思えば思うほど、悲しくて。

ここで見る純粋な星たちも、もう見られない。

入学して、出来た友達も、何もかもまたなくなってしまふ。

初めて着た制服の感触も、すんごく緊張した入学式の日の思いも。

なにもかも……。

私は、足が向かう先にあの草原があることに気がついて涙が流れてしまった。

そう考えると涙がとまらなくて。あの日泣いたこの場所が、おかえり、と言って

くれたような気がして。

なにもかも、学への思いからはじまり、それだけではとどまるどころか、

友達が出来て、思い出ができて。

もう、全てが変わってきている。

もう、帰りたくない！！！！！！

「ふえくん！！！！」

子供のように声をあげて泣き散らした。

誰もいない。

それなら、これを最後にしよう。泣くのは、最後にしよう。

だから、泣こう！！思う存分泣いてやる！！

私は、いままでの全てを涙にこめながらずーっと泣いた。

その時だった。

後ろから、音がした。

草が踏まれる音がする。

でも、涙は止まらない。もう、いいや。

人がいても、いなくても。

「ひつく・・・ふえくん！！！！」

「何、泣いてんの。泣くなよ。」

誰？誰？

この、声・・・。

頭にのっかる大きな重み。

温かくて心地よいこの感じ。

学だぁ・・・。

ぎゅち、ぎゅちに閉じていた目をゆっくり開くとそこには学が笑う顔があった。

変わらない。この笑顔。この大きな手。

私は、昔と今が重なる錯覚に陥りながらも、しっかりと目を見開いてその顔を見つめた。
でも、途中で視界がゆがんで何も見えなくなっていた。
もう、だめー！！！

「おい。泣くなつてー！！」
ぼふっ！！

私は、泣きすぎのあまり平常心を失ってしまっていたようで、本能的に抱きついてしまっていた。

恥ずかしいとかそんな、気持ちも通り越して、安心してしまった。

「んっ……。」

「ひっく……。」

驚いたかな??でも、もうだめだもん。

「おかえり。」

不意に、上から声がした。

「ただいま。」

もう、これしか言えないの。これ以上言ったら。また泣いちゃいそう。

この日4月22日。

わたしは、初めてお父さん以外の男の人に抱きつきました。

ときどき、音をたてる私の心。

これが、恋……。

嬉しくて、嬉しくて、ちょっぴり切ない。

私が、泣き止んだのはいつだったのか自分でもわかりません。

ただ、次の日の部活で顔が熱くて熱くて・・・。
火が出るような思いをしました。

でも、学はいたって普通でそんなところに、またまた顔を赤らめて
しまいました。

4月22日。

私が、帰ってきたあの草原の遙か上で輝く星は私に言ったような気が
します。

「星に願いを唱えれば、いつかは叶う、叶うんだよ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0098q/>

星に願いを

2011年3月5日13時27分発行